香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報

平 成 10 年 度

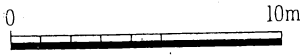
汲 仏 遺 跡

1999.3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度　汲仏遺跡

正誤表

位置	誤	正
3～4頁(折込図)		

例　　言

1．本書は，香川県警本部機動隊舎建設に伴い平成10年度に実施した汲仏遺跡の埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。

2．本調査は，香川県教育委員会文化行政課が調査主体となり，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．本年度の財団法人香川県埋蔵文化財調査センターの調査組織は次のとおりである。

総括

所長	菅　原　良　弘
次長	小　野　善　範

総務

副主幹兼係長	田　中　秀　文
主査	長　尾　寿江子
参事	別　枝　義　昭

調査

主任文化財専門員	廣　瀬　常　雄
文化財専門員	山　元　素　子
文化財専門員	岡　本　　利
調査技術員	滝　井　理　加
参事	長　尾　重　盛

4．調査に際しては次の機関に御協力を頂いた。記して謝意を表したい。(順不同，敬称略)
建設省中国地方建設局，香川県警察本部，地元各自治会，地元各水利組合

5．本書で使用した略号は次のとおりである。
SB；掘立柱建物　　SD；溝　　SK；土坑　　SP；ピット　　SX；性格不明遺構

6．本書で用いている方位の北は国土座標系第Ⅳ系の北であり，標高はT.P.を基準としている。

7．挿図の一部は，国土地理院地形図(1/25,000)を使用した。

8．本書の執筆，挿図の作成・浄書は調査担当職員が分担して行い，編集は山元が行った。

本 文 目 次

1．調査に至る経緯と経過 …… 1
2．調査の成果 …… 2
　1．立地と環境 …… 2
　2．弥生時代前期の遺構・遺物 …… 5
　3．弥生時代後期の遺構・遺物 …… 8
　4．平安時代の遺構・遺物 ……10
　5．まとめ ……12

挿 図 目 次

図1　調査区割図（1/600） …… 1
図2　周辺遺跡図（1/50,000） ……2
図3　遺構配置図（1/250） …… 3～4
図4　Ⅲ区ＳＤ下02断面図（1/40） …… 5
図5　Ⅲ区ＳＤ下08断面図（1/40） …… 5
図6　Ⅰ区ＳＤ01断面図（1/40） …… 5
図7　Ⅱ区ＳＫ04平・断面図（1/40） ……6
図8　Ⅱ区ＳＫ05平・断面図（1/40） ……6
図9　弥生時代前期遺構出土土器（1/4） …7
図10　Ⅱ区ＳＤ05断面図（1/40） …… 8
図11　Ⅲ区ＳＤ下01断面図（1/40） …… 8
図12　Ⅲ区ＳＫ下02平・断面図（1/20） …… 9
図13　Ⅰ区ＳＫ12平・断面図（1/40） …… 9
図14　Ⅰ区ＳＫ03出土土器（1/4） …… 9
図15　Ⅰ区ＳＫ08平・断面図（1/40） …… 9
図16　Ⅲ区ＳＢ01･02平断面図（1/100） …… 11
図17　Ⅱ区ＳＰ33出土土器（1/4） ……11
図18　周辺地形図（1/10,000） ……13

写 真 目 次

写真1　Ⅲ区ＳＤ下02土器出土状況（北から） …… 5
写真2　Ⅲ区ＳＤ下08（陸橋部横）土器出土状況（西から） …… 5
写真3　Ⅱ区ＳＸ下02土器出土状況（東から） …… 6
写真4　Ⅰ区ＳＸ02土器出土状況（北から） …… 6
写真5　Ⅰ区ＳＫ09土器出土状況（北東から） …… 6
写真6　Ⅱ区ＳＤ05土器出土状況（北から） …… 8
写真7　Ⅲ区ＳＤ下01土器出土状況（南から） …… 8
写真8　Ⅰ区ＳＸ03土器出土状況（北西から） …… 9
写真9　Ⅰ区ＳＫ12土器出土状況（西から） …… 9
写真10　Ⅰ区ＳＢ01（東から） …… 10
写真11　Ⅱ区ＳＢ01･02（南から） …… 10
写真12　Ⅰ区全景（東から） …… 13
写真13　Ⅱ区西半部（南から） …… 13
写真14　Ⅱ・Ⅲ区ＳＤ下02・ＳＤ下08（南から） …… 13

1．調査に至る経緯と経過

香川県警察本部は，機動隊舎を多肥下町にある四国管区警察局用地内への移転する計画を進めている。そのことに伴い，事業予定地内の埋蔵文化財の包蔵状況を確認し，保存協議に必要な資料を得るため，香川県教育委員会文化行政課が平成９年９月に当該地に試掘調査を実施したところ，弥生時代後期の土器を多量に含む溝跡を２個所で確認し，事業範囲全域に遺跡が広がるものと判断した。事業の実施に先立って文化財保護法に基づく保護措置を図る必要があり，香川県教育委員会は建設省中国地方建設局と協議を行い，全面的な発掘調査を行うことになった。遺跡名は「汲仏遺跡」となった。

汲仏遺跡の調査は平成10年４月１日付で香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき，平成10年10月１日から４ヶ月の期間で本館・車庫・配管部分の調査を実施した。調査区は車庫部分をⅠ区，本館部分を東西に分割して，西側をⅡ区・東側をⅢ区とし，Ⅰ区から順次調査を行った。現地調査は平成11年１月31日をもって終了した。

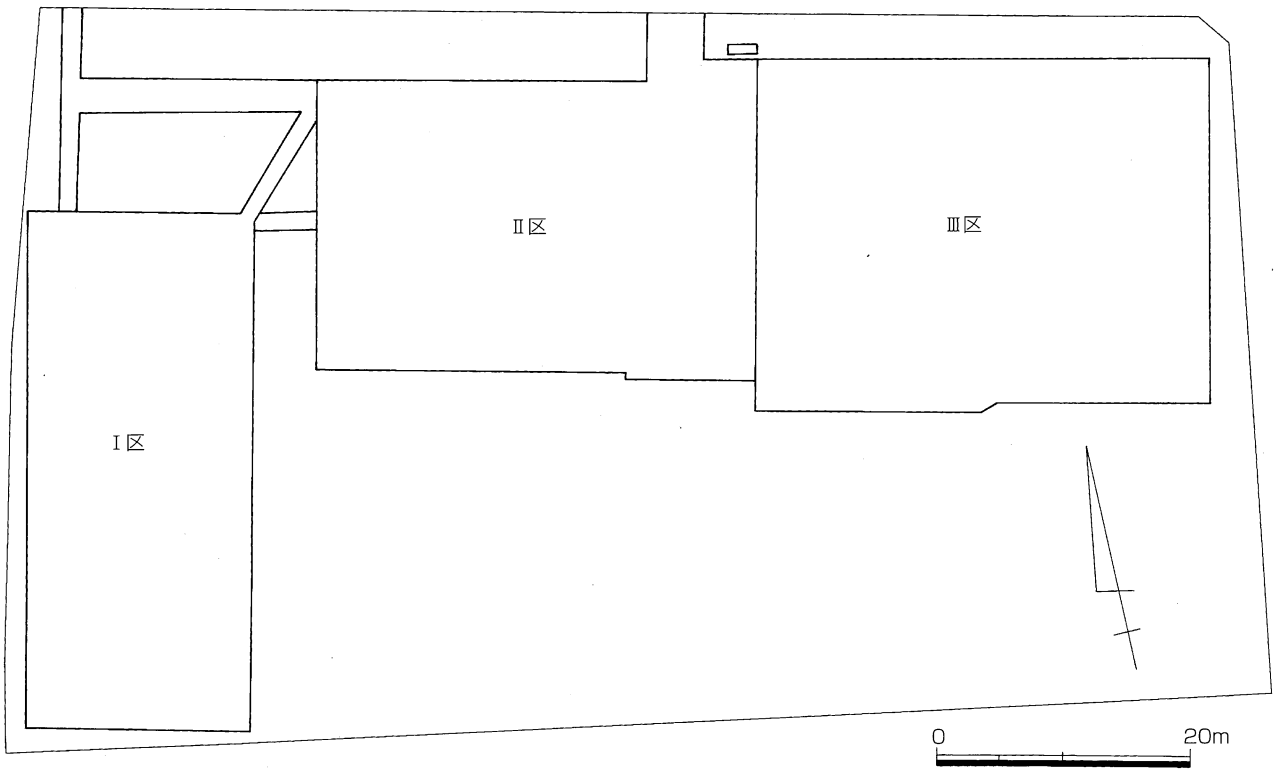


図1　調査区割図(1/600)

2．調査の成果

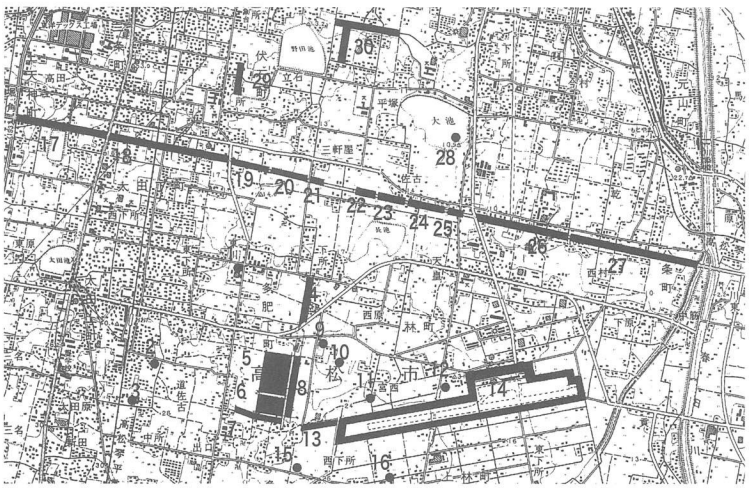
1．立地と環境

汲仏遺跡は高松平野の中央部南よりに所在する遺跡である。地形的には塩江町に源を発する香東川によって形成された扇状地上にある。香東川の扇状地は香川町川東の西部付近を扇頂，紫雲山・浄願寺山付近を扇端とし，春日川の西側500m付近まで及ぶ。凸凹が少なく南から北に向かって緩やかに傾斜している。

本遺跡周辺では，近年大規模な開発事業（高松東道路建設事業・インテリジェントパーク建設事業・新設高校建設事業など）が進み，それに伴って多くの遺跡が発見されている。当該地周辺の弥生時代の遺跡の調査例は多く，代表的な調査例としては，上天神遺跡，多肥松林遺跡，日暮・松林遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡，井手東Ⅰ遺跡などがある。弥生時代前期の遺跡では，浴・長池Ⅱ遺跡があり小区画水田が検出されている。弥生時代中期では，多肥松林遺跡で自然河川の中から中期の土器や木製品（鳥形木製品，剣形木製品，広鍬などの農耕具等），石器などが出土し，竪穴住居跡や掘立柱建物跡も検出されている。また凹原遺跡では弥生時代後期の14棟の竪穴住居跡や井戸，壺棺墓などを検出している。また空港跡地遺跡からは，竪穴住居跡を始めとして，円形・方形の周溝状遺構を検出している。

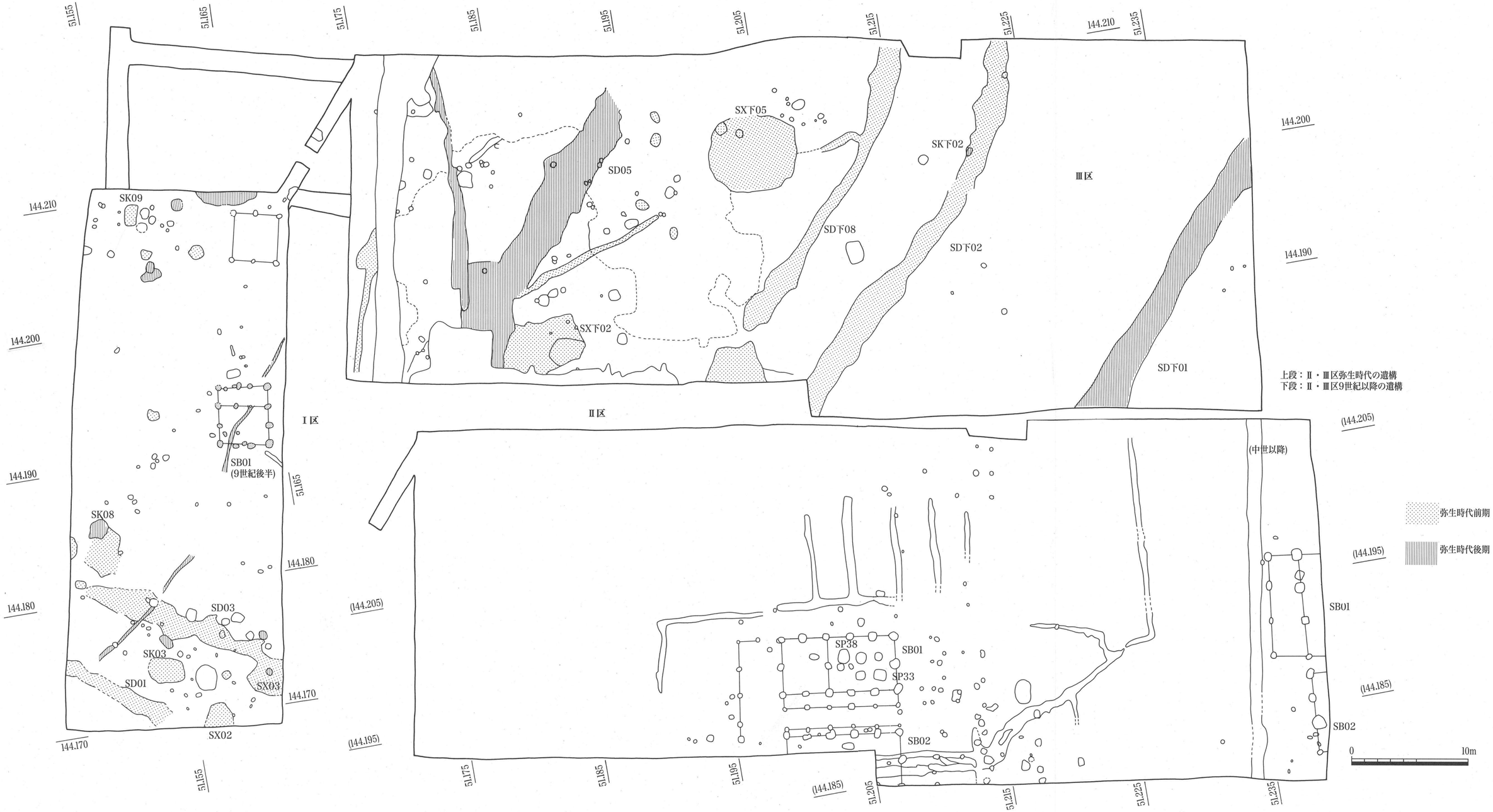
古墳時代の遺跡としては，石清尾山古墳群を始めとする数多くの古墳が知られているが，高松平野中央部での集落遺跡としては調査例が少ない。しかし空港跡地遺跡では集落跡が検出されたほか，この時期のものとしては，あまり類例の見られない人形土製品が出土しており，偶像における性器表現の最古の事例と考えられ，全国的にも貴重な資料となっている。

古代の遺跡としては，空港跡地遺跡等から集落跡が検出されたほか，前田東・中村遺跡では大きな規模を持つ掘立柱建物跡群を検出しており，帯金具・墨書土器などといった出土遺物から官衙的な役割を有していた可能性が指摘されている。また，多肥松林遺跡では平安中期から後期にかけての24点の墨書土器が出土し，平安時代後期には条里型地割の延長線上に当たる溝や掘立柱建物跡を検出している。



1 汲仏遺跡
2 北原遺跡
3 多肥廃寺
4 凹原遺跡
5 多肥松林遺跡(新設高校)
6 多肥松林遺跡(高松土木)
7 多肥松林遺跡
8 日暮・松林遺跡
9 下池遺跡
10 池ノ内遺跡Ⅱ
11 宮西・一角遺跡
12 一角遺跡
13 多肥宮尻遺跡
14 空港跡地遺跡
15 桜木神社南方散布
16 拝師廃寺
17 上天神遺跡
18 太田下・須川遺跡
19 蛙股遺跡
20 居石遺跡
21 井手東Ⅱ遺跡
22 井手東Ⅰ遺跡
23 浴・長池Ⅱ遺跡
24 浴・長池Ⅰ遺跡
25 浴・松ノ木遺跡
26 林・坊城遺跡
27 六条・上所遺跡
28 大池遺跡
29 キモンドー遺跡
30 松縄下所遺跡

図2　周辺遺跡図(1/50,000)



上段：Ⅱ・Ⅲ区弥生時代の遺構
下段：Ⅱ・Ⅲ区9世紀以降の遺構

図3　遺構配置図(1/250)

2．弥生時代前期の遺構・遺物

当該期の遺構としては溝と土坑を検出した。溝はⅢ区とⅡ区の境付近で緩く弧を描きながら北東方向へ平行して，断面形がＶ字状またはＵ字状の２条，Ⅰ区南端付近で北東方向へ平行して断面形の浅いⅢ形の溝２条を検出した。Ⅰ区で検出した２条の溝とⅢ区で検出した２条の溝は，規模や断面形状は異なるが，溝と溝の間隔はほぼ等しく両者は繋がる可能性が高い。これらの溝は２重の環濠になる可能性が高い。

想定した環濠の内側には集落域が想定されるが，竪穴住居などの居住遺構を確認することはできなかった。環濠に隣接して直径７ｍ程度の円形の遺構があったが，ピット等は確認できず，竪穴住居と断定することはできなかった。しかし，環濠の内側に当たる部分では当該期の土器を多量に含む土坑が数基確認されており，居住地区であった可能性は高いと思われる。

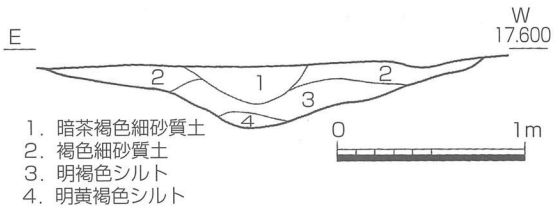


図4　Ⅲ区SD下02断面図(1/40)

Ⅲ区ＳＤ下02　Ⅲ区の西端付近で緩く弧を描きながら南北方向に走る溝である。溝の下端のレベルから，南から北へ傾斜していたことがわかる。幅約2.4m，深さ30㎝，断面は緩いＶ字型を呈する。土層断面から掘り直しをした可能性があり，溝内部の南半部からはおおむね掘り直し後の溝の底付近から弥生土器甕，壺などの大きい破片が固まってコンテナ3箱分出土した。溝の時期は弥生時代前期後半前葉と考えられる。

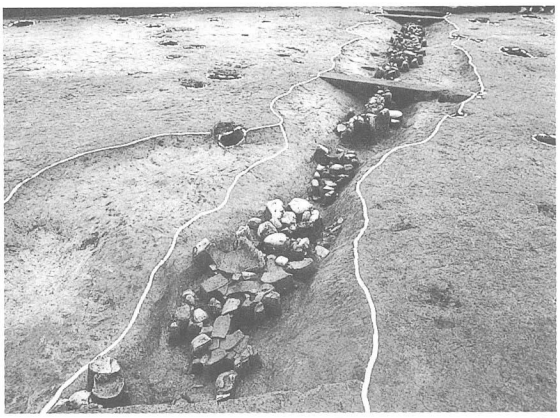


写真1　Ⅲ区SD下02土器出土状況(北から)

Ⅲ区ＳＤ下08　Ⅱ区とⅢ区の境付近で，Ⅲ区ＳＤ下02にほぼ平行して検出した南北方向に走る溝である。幅約１ｍ，深さ50㎝，断面形は北半部ではＶ字型を呈するが，南端付近では溝のラインは途切れ，この部分は陸橋部になると思われる。この陸橋部の南側で断面３角形の突帯を３条付けた壺が横倒しになって出土した。後世の攪乱で西半分は失われていたが，本来は完形であったと思われる。溝の中位からはⅢ区ＳＤ下02同様弥生土器壺，甕の破片がコンテナ2箱分出土した。時期は弥生時代前期後半前葉頃と考えられる。

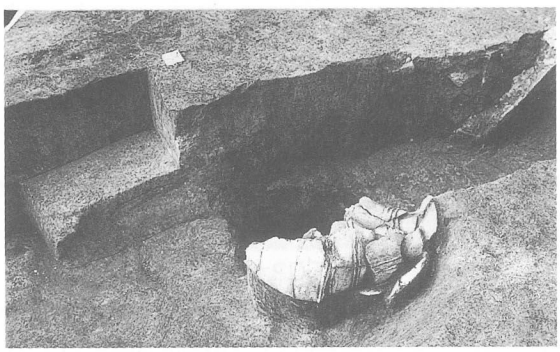


写真2　Ⅲ区SD下08(陸橋部横)
土器出土状況(西から)

Ⅰ区ＳＤ01　Ⅰ区南端付近を東南から西北方向へ走る溝である。溝の東南側と西北側では溝底部のレベル差

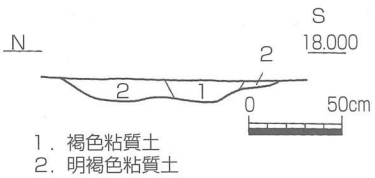


図6　Ⅰ区SD01断面図(1/40)

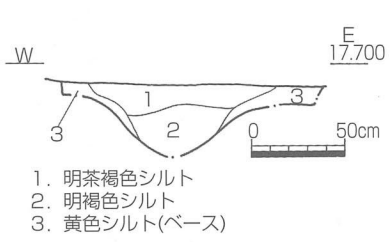


図5　Ⅲ区SD下08断面図(1/40)

はほとんどないが，周辺の地形から考えれば，西南方向へ傾斜していたと考えられる。途中数カ所を後世の攪乱により破壊されているが，幅1.2m，深さ10cm，断面形は浅い皿形で，溝の断面より掘り直しが行われた可能性がある。溝の時期は出土遺物より弥生時代前期と考えられる。

Ⅰ区ＳＤ03　Ⅰ区ＳＤ01の北側約７ｍの位置でほぼ平行して検出した溝である。溝底部のレベルから西南方向へ流れていたと考えられ，幅１ｍ，深さ５cm，埋土は明褐色粘質土で断面形は浅い皿形である。時期は弥生時代前期と考えられる。

Ⅱ区ＳＸ下05　Ⅱ区とⅢ区の境付近で検出した円形の落ち込みである。直径７ｍ，深さ35cm程度である。埋土中からは弥生土器壺・甕の他，石鏃・サヌカイト片・磨製石斧・磨製石包丁などの石器類も多く出土した。遺構を掘り進める途中に内部からピットを数穴検出した。いずれも直径30cm，深さ20cm程度で褐色シルトの埋土をもつ。しかし，土層断面によればピットは落ち込みがほとんどまたは完全に埋まった後で掘り込まれており，落ちに伴うものではなかった。この遺構の時期は弥生時代前期後半頃と考えられる。

Ⅱ区ＳＸ下02　Ⅱ区南端中央部付近で検出した不定形の浅い落ち込みである。長径７ｍ，短径4.6m，深さ10cm，埋土はおおむね褐色～明褐色シルトであるが，わずかであるが焼土塊が含まれていた。遺構内からは少し浮いた状態で弥生時代前期後半前葉頃の土器や礫がほぼ一面に出土した。

Ⅱ区ＳＫ04　Ⅱ区中央付近で検出した土坑である。楕円形で，長径１ｍ，短径0.65m，深さ15cmである。土坑内部からは壺が２個体分とその上部に礫が埋められていた。壺のうち１個体はほぼ完形に復元できる。時期は弥生時代前期後半前葉頃と考えられる。

写真3　Ⅱ区SX下02土器出土状況(東から)

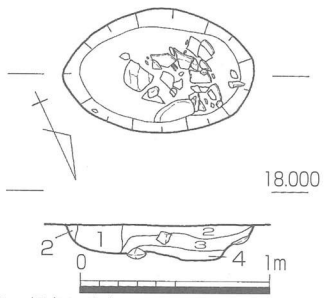


図7　Ⅱ区SK04平・断面図(1/40)

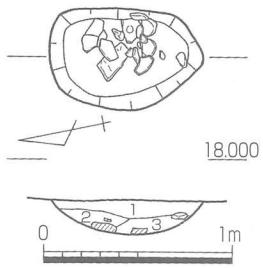


図8　Ⅱ区SK05
平・断面図(1/40)

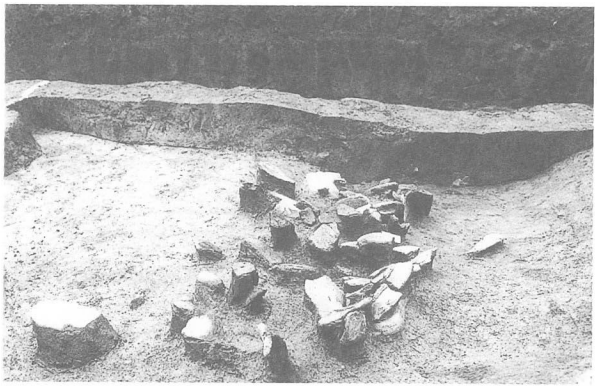


写真4　Ⅰ区SX02土器出土状況(北から)

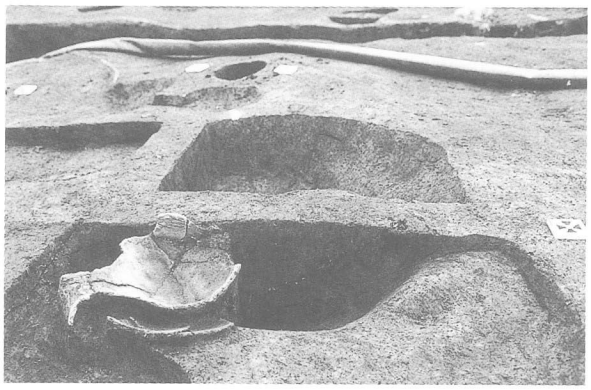
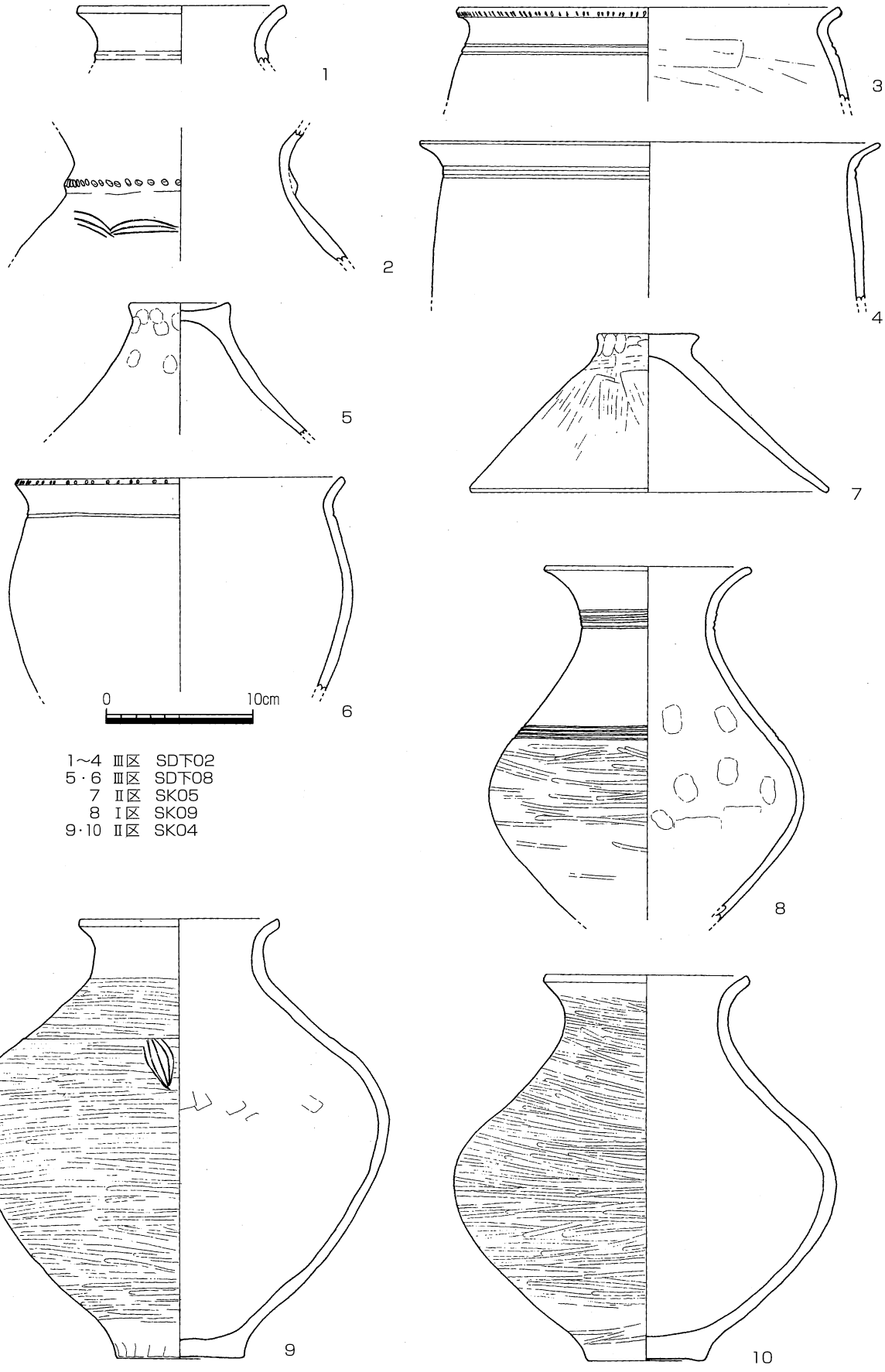


写真5　Ⅰ区SK09土器出土状況(北東から)



1～4 Ⅲ区 SD下02
5・6 Ⅲ区 SD下08
7 Ⅱ区 SK05
8 Ⅰ区 SK09
9・10 Ⅱ区 SK04

図9 弥生時代前期遺構出土土器(1/4)

Ⅱ区ＳＫ05　ＳＫ04に近接して検出した土坑である。楕円形で長径0.8m，短径0.55m，深さ20㎝である。土坑内部からは礫と弥生土器鉢が折り重なって出土した。時期は弥生時代前期後半前葉と考えられる。

Ⅰ区ＳＫ09　Ⅰ区北端付近で検出した土坑である。長方形を呈し，長辺1.6m，短辺0.9m，深さは10㎝である。土坑の北半部の下面に直径80㎝，深さ20㎝程度の不整円形の落ち込みがあるが，これらは埋土から別遺構とは考えられない。この不整円形の落ち込みの下面およびⅠ区ＳＫ09の上面の埋土中に炭が混じっていた。不整円形の落ち込みの東肩に壺が横向きに出土した。この壺より弥生時代前期後半前葉と考えられる。

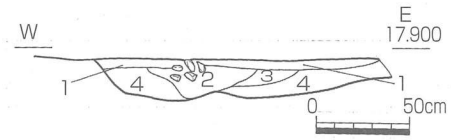
Ⅰ区ＳＸ02　Ⅰ区南端で検出した。遺構の南部は調査区外へ延び，全体の規模・形状は不明であるが，おおむね長径1.7m以上，短径２m，深さ30㎝である。遺構内からは弥生土器壺，甕がコンテナ1箱分出土した。弥生時代前期後半前葉と考えられる。

Ⅰ区ＳＫ07　Ⅰ区西端，ＳＤ03の北肩に接して検出した土坑である。土坑の西側は調査区外へ延びる。長楕円形または円形と考えられ，直径1.6m以上，深さ10㎝である。土坑内からは弥生土器壺が出土した。時期は弥生時代前期と考えられる。

３．弥生時代後期の遺構・遺物

弥生時代後期の遺構としては南西から北東方向へ延びる溝を２条，土器棺墓を３基検出した。溝２条からは土器が多量に出土しており，近接して居住地域があったと思われるが，調査地内では検出しなかった。

Ⅱ区ＳＤ05　Ⅱ区中央部付近で検出した溝である。幅約2.5m，深さ40㎝である。周辺の地形が南西から北東へ傾斜しており，溝もその方向へ掘削したものであろう。溝の底から浮いた状態で弥生時代後



1．褐色砂混粘質土　3．褐色シルト
2．茶褐色シルト　4．明褐色シルト

図10　Ⅱ区SD05断面図(1/40)

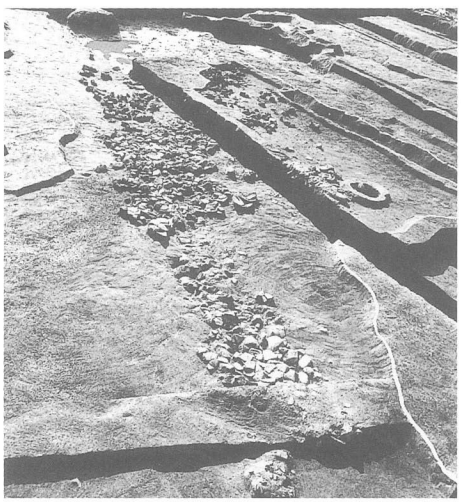
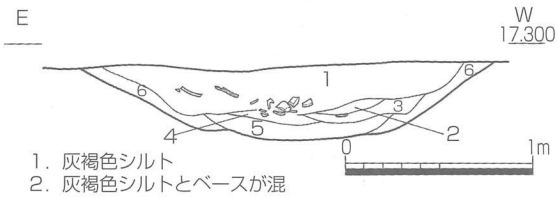


写真6　Ⅱ区SD05土器出土状況(北から)



1．灰褐色シルト
2．灰褐色シルトとベースが混
3．茶褐色シルト
4．ベースブロック
5．明褐灰色シルト
6．明茶褐色シルト

図11　Ⅲ区SD下01断面図(1/40)

写真7　Ⅲ区SD下01土器出土状況(南から)

期初頭の土器の小破片が拳大の礫とともに固まって出土した。

Ⅲ区ＳＤ下01　Ⅲ区東端付近の下層遺構面で検出した南西から北東方向へ走る溝である。方向はⅡ区ＳＤ05の東側へ約55mの位置でほぼ平行している。溝の規模，出土土器量ともⅢ区ＳＤ下01の方が大きい。幅２m，深さ40cmである。おおむね溝の最上層の最底部付近で，弥生土器甕・壺・高坏などの大きな破片が溝全体に敷き詰められるように出土した。また，溝の中部付近で，土器が出土したのと同じくらいのレベルで，5～10cm大の礫が一面に敷き詰められていた。時期はⅡ区ＳＤ05同様弥生時代後期初頭である。

Ⅰ区ＳＸ03　Ⅰ区南東端付近で検出した。弥生時代前期の落ちと重複しており，調査時の不注意から掘方を検出することができなかった。後世の削平により上部は既に失われているが，底部を南西方向に向けた壺の上部に高坏を逆向きにしてかぶせてやや傾けて立たせていた。壺棺墓であろう。弥生時代後期である。

Ⅰ区ＳＫ12　Ⅰ区北端付近で検出した。ほぼ円形で直径0.9m，深さ25cmである。土坑内からは壺が傾けて置かれていた。壺の上半部は後世の削平により失われていたが，底部を北西方向に向け，壺をやや傾けて置き，壺の下には小石を２個壺を安定させるために置いていた。Ⅰ区ＳＸ03と同様壺棺墓と考えられる。時期は弥生時代後期である。

Ⅲ区ＳＫ下02　Ⅲ区ＳＤ下02の上面から切り込まれた土坑である。長楕円形で長径0.65m，短径0.45m，深さ15cmである。これも後世の削平により上部が失われており，壺が横向きに転んだ状態で出土したが，壺の蓋に高坏や鉢を使用していたかどうかは上半部が失われているため不明である。壺棺墓と考えられる。弥生時代後期である。

写真8　Ⅰ区SX03土器出土状況(北西から)

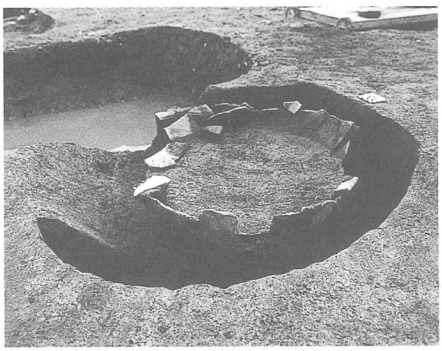


写真9　Ⅰ区SK12土器出土状況(西から)

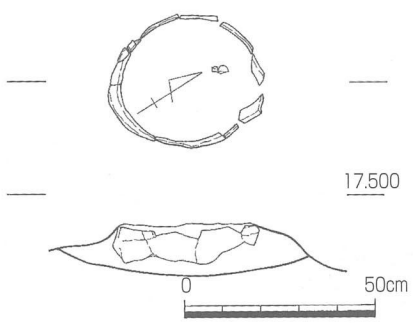


図12　Ⅲ区SK下02平・断面図(1/20)

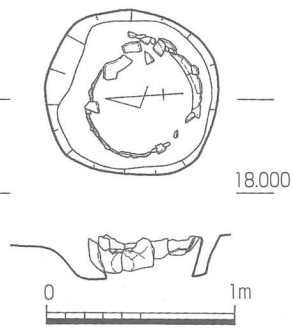


図13　Ⅰ区SK12平・断面図(1/40)

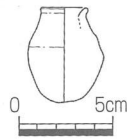


図14　Ⅰ区SK03出土土器(1/4)

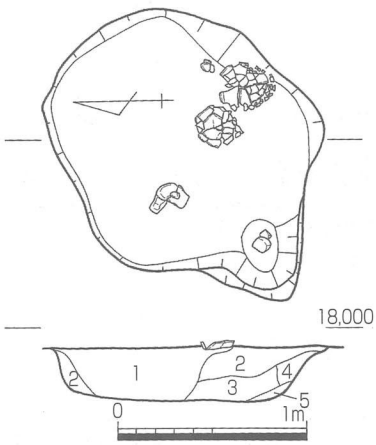


図15　Ⅰ区SK08平・断面図(1/40)

Ⅰ区ＳＫ03　Ⅰ区南部，ＳＤ03の上面から掘り込まれた土坑である。長楕円形で長径0.95m，短径0.65m，深さ10cmである。土坑内から壺の小型品が完形で出土した。時期は出土遺物から弥生時代後期前半頃と考えられる。

Ⅰ区ＳＫ08　Ⅰ区西側で検出した土坑である。不整円形で，直径約1.35m，深さ30cmである。土坑の最上位で，上半部は削平されていたものの，甕が横方向に転んで２個体出土した。時期は弥生時代後期である。

４．平安時代の遺構・遺物

Ⅰ区～Ⅲ区にかけて，やや散在してではあるが，掘立柱建物を合計５棟復元した。いずれも現在周辺に残る条里型地割の方向と同じものである。位置的には東西方向に広がりを持つが，南北方向はいずれもほぼまとまっている。また，Ⅱ区の掘立柱建物の北側と西側を取り囲むように同方向に溝が巡り，北側の東西方向の溝から2.5～3m間隔で北側へ溝が延びる。柱穴の深さが深いのに比べて，いずれも幅0.5m，深さ10cm程度で浅いものであるが，後世の削平により上面を削られている可能性もある。

Ⅲ区南側からⅢ区中央部にかけて深さ５cmの浅い溝が走るが，この溝の下部から掘立柱建物と同時期と考えられるピットを検出しており，この溝は掘立柱建物よりやや後出するようである。この溝からは10世紀前半頃の近江産の緑釉陶器椀が出土した。

Ⅰ区ＳＢ01　Ⅰ区中央部東寄りで検出した掘立柱建物である。Ｎ９°Ｅで，桁行３間(4.5m)，梁間３間(3.8m)で北側に庇または間仕切りをもつ。柱穴はおおむね円形で，直径40～60cm，深さ30～40cmである。柱穴には根石や詰石を持つものがあり，１穴には柱材が遺存していた。

Ⅱ区ＳＢ01･02　Ⅱ区東南部で検出した。この付近で検出したピットはいずれも柱筋がよく並ぶので他の復元も考えられるだろうが，掘立柱建物２棟と柵列１列を復元した。掘立柱建物はＮ79°Ｗの東西棟のものが南北に柱筋を合わせて２棟，その西側に柵列を配する。北側の掘立柱建物（ＳＢ01）は桁行５間(8.6m)，梁間３間(5.3m)で南側へ庇が付く。身舎の中央やや西寄りに間仕切りを持つ。柱穴はほぼ円形で，身舎部分で直径60cm程度，深さ30cm程度，庇部分で直径20～40cm程度，深さ20cm前後である。柱穴内部に根石や詰石を持つものが多い。

南側の掘立柱建物（ＳＢ02）は推定で桁行５間(8.6m)，梁間２間(4.8m)で北側の柱穴列の北側約50cmの位置に，掘立柱建物の柱穴に対応して柱穴が並ぶ。庇列になる可能性もあろうが，身舎の柱穴

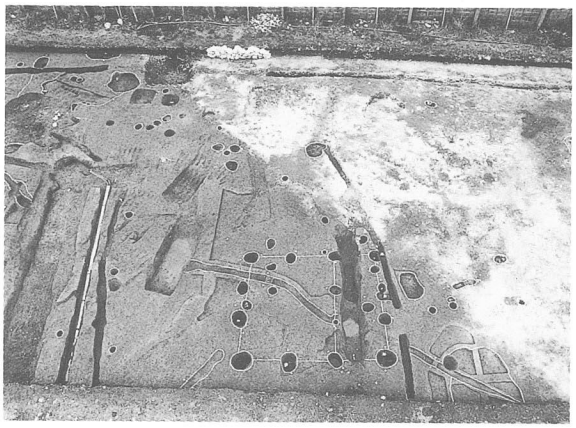


写真10　Ⅰ区SB01(東から)

写真11　Ⅱ区SB01・02(南から)

列と近すぎるので，違う機能を持つ可能性もある。柱穴の規模・形状はＳＢ01と似る。

Ⅲ区ＳＢ01・02　Ⅲ区東端中央部で検出した掘立柱建物である。いずれもN3°Ｅで調査区外へ延びると考えられ，規模は明らかにはできないが，掘立柱建物が南北に２棟並ぶと考えられる。北側の掘立柱建物（ＳＢ01）は桁行３間，梁間は不明ある。西側柱穴列は長辺60㎝程度，短辺50㎝程度の隅丸方形であるのに対し，東側柱穴列は直径70～80㎝，深さ50～60㎝の円形で根石や詰石をもつ柱穴が多く，西側柱穴列は庇になる可能性がある。東側柱穴列の約4.2ｍ東側で水路工事を行った際，高松市教育委員会が調査を行っているが，その際当該期の柱穴列が検出されており，ＳＢ01・02と関連する可能性がある。

南側の掘立柱建物（ＳＢ02）はおおむねＳＢ01と柱穴列を揃える。桁行または梁間が３間で，柱穴の規模・形状はＳＢ01と似るが，南側の柱穴だけ直径33㎝，深さ20㎝とやや小振りである。

Ⅱ区ＳＰ33　Ⅱ区ＳＢ01の内部にあたる位置で検出したピットである。楕円形で，長径1.1m，短径0.9m，深さ20㎝である。埋土はⅡ区ＳＢ01と同じで，掘立柱建物とは同時期と考えられる。ピット内からは京都産の緑釉陶器皿が出土した。９世紀後半のものと考えられる。

Ⅱ区ＳＰ38　Ⅱ区ＳＢ01の内部，ＳＰ33の東側で検出したピットである。円形で直径0.85m，深さ20㎝ある。埋土はＳＢ01柱穴やＳＰ33と同じであり，同時期のものと考えられる。ピット内からは金属製品が出土した。ハート形に近い形状で長軸2.5㎝，短軸2㎝程度の大きさで，中に直径７㎜程度の円形の孔が左右両側にあけられていた。用途は不明である。

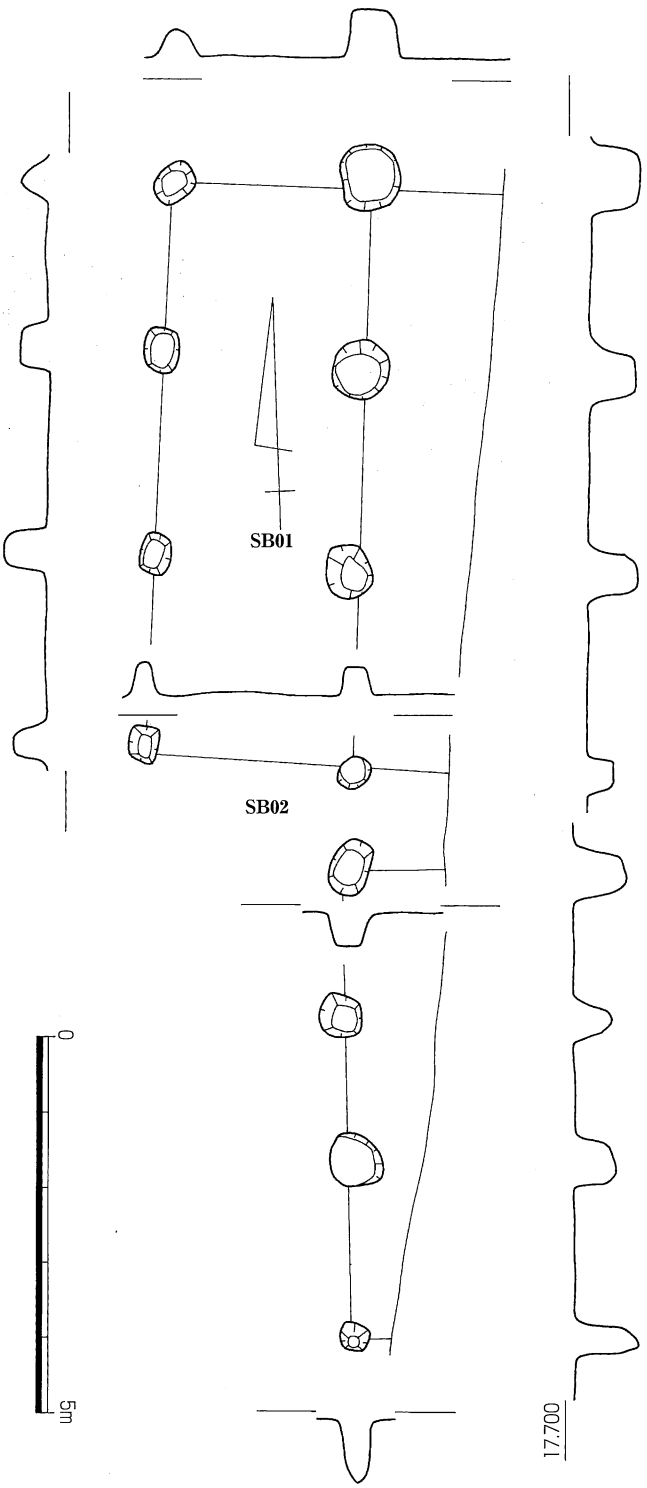


図16　Ⅲ区SB01・02平・断面図(1/100)

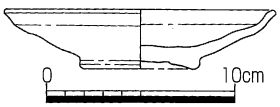


図17　Ⅱ区SP33出土土器
(1/4)

5．まとめ

今回の調査では弥生時代前期・後期，平安時代の遺構群を検出した。特に弥生時代前期後半前葉の環濠は県内でもかなり古い例に属する。２重の環濠のうち外側の環濠は掘り直しの痕跡がみられたことで環濠の成り立ちが段階を追っていることがわかる。また，内側の環濠で陸橋部がみられたこと，それに接して完形と思われる大型の壺が置かれていたことなども興味深い。当遺跡の西端から西側の位置に旧河道の痕跡が認められ，断言はできないが，環濠の西側を画する可能性も考えられる。環濠の内側に当たる位置から土坑を数基検出した。その中にはまとまった土器量を含むものや，完形に近い土器を含むものが多くある。今回の調査において，明確な住居跡を検出することができず，今後汲仏遺跡の弥生時代前期の集落の様相を明らかにしていくことが大きな課題である。なお，汲仏遺跡の北方約2.5㎞の天満・宮西遺跡では弥生時代前期の１重の環濠とその内側に土坑群を配した遺構群が検出されている。

当遺跡は天平７年に作成されたとされる弘福寺領讃岐國山田郡田図の北比定地と南比定地の中間よりほぼ東よりの，山田・香川郡境を越えた香川郡側に位置し，当遺跡の北1.8㎞に位置する松縄・下所遺跡では７世紀中頃から８世紀後半の現在の地割に沿う幹線道路が検出されている。当遺跡周辺は条里型地割が比較的よく残る地域であるが，この地域では条里型地割が比較的早く取り入れられたと考えられる。当遺跡では奈良時代まで遡る遺構はなかったが，太田下・須川遺跡で検出した自然河川からは平安時代中頃の斎串，人形などが，多肥松林遺跡で検出した自然河川からは24点もの墨書土器が出土している。いずれも集落は検出していないが，近隣に集落があったことは確実と思われ，特に多肥松林遺跡では周辺に識字層が居住していたと考えられる。当遺跡の掘立柱建物群は，ピット群の広がりからⅡ区の南側やⅢ区の東側へ広がる可能性もあるものの，おおむね１から２棟がグループになり，グループ間は散在していたようである。また，ピットの切り合い関係はほとんどなく，存続期間もあまり長くないようである。しかしⅡ区やⅢ区の掘立柱建物は柱穴も大きく根石や詰石を持つものが多く，京都産の緑釉陶器も出土している。比較的短期間しか存続しなかったこと，建物の規模が大きいことから考えれば，何らかの外的力によりつくられ，必要がなくなって廃絶したようにも思われる。今後他の遺跡の掘立柱建物群と比較することにより，この掘立柱建物群の性格を明らかにしていく必要があろう。

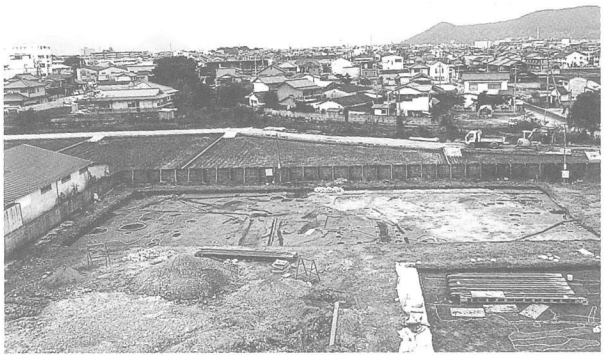


写真12　Ⅰ区全景(東から)

写真13　Ⅱ区西半分(南から)

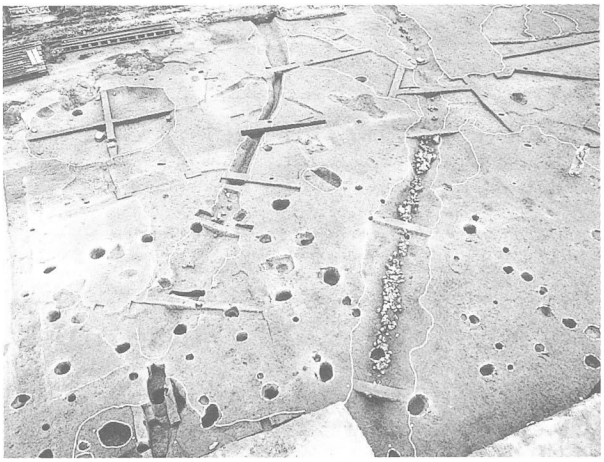


写真14　Ⅱ・Ⅲ区SD下02・SD下08(南から)

図18　周辺地形図(1/10,000)

報告書抄録

ふりがな	かがわけんけいさつほんぶきどうたいしゃけんせつにともなうまいぞうぶんかざいちょうさがいほう こんぼとけいせき
書名	香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋蔵文化財調査概報　汲仏遺跡
副書名	
巻次	平成10年度
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山元素子・岡本利
編集機関	財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター
所在地	〒762-0024　香川県坂出市府中町南谷5001-4　TEL 0877-48-2191
発行機関名	香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
発行年月日	平成11年３月31日

総頁数	目次等	本文	観察表	図版	写真枚数	挿図枚数	付図枚数
17　頁	4　頁	13　頁	0頁	0頁	14枚	18枚	0枚

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
こんぼとけいせき 汲仏遺跡	かがわけんたかまつしたひしもまち 香川県高松市多肥下町1262-1	37201		34° 17′ 58″	134° 3′ 23′	19981001 ～ 19990131	2,470㎡	香川県警察本部機動隊舎建設に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
汲仏遺跡	集落跡	弥生時代前期	溝・土坑	弥生土器・石器	
		弥生時代後期	溝・土器棺墓・土坑	弥生土器	
		平安時代	掘立柱建物・溝	土師器・須恵器 緑釉陶器 不明金属器	

香川県警察本部機動隊舎建設に伴う
埋蔵文化財調査発掘調査概報
平成10年度

汲仏遺跡

1999年3月

編集　〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4
財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター

発行　香川県教育委員会
財団法人　香川県埋蔵文化財調査センター

印刷　富士印刷株式会社